

# 文化

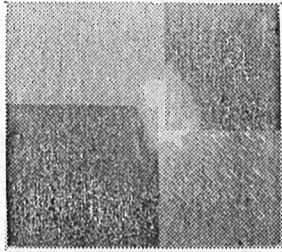
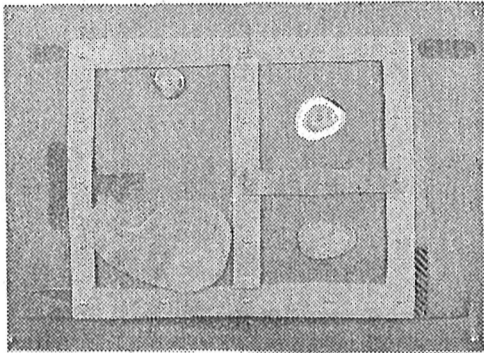
## 展況

●永津慎三個展 15日まで、スルガ画廊(東京・中央区銀座六の五の八) 褐色やグレイのかかった重い色調で不定形の生命体があふくような、神秘的空間を構築しています。深海にゆれる無名の生物を想像させる形。一見うす気味悪い色彩が、重ねられた細い斜線の面の奥に別の色を見せる透明感を含んでいます。生命の神秘をそらした空間の奥へ奥へと進んでつきとめようとする営みです。

●馬場彬展 22日まで、東邦画廊(東京・中央区日本橋二の六の五) 墨や淡彩による平面の形象は柔軟で彫り込みがあります。シンブルな佇まいのなかに手づくりの温かみがある画面に、部分的に半透明のフィルムをかぶせたり、鉛の小さな塊や薄い板をネジ止めしたコラージュ。水に溶けてみそうに淡く輝く色調と重い鉛の質感が意外な調和をみせています。切り紙のような雑推感とともに「子

●沖保洋個展 18日まで、るな(東京・目黒区自由ヶ丘二の九の六) 子どもや老翁を独特の描法で描き日本アンデパンダン展などで発表してきた埼玉在住の画家。赤みがかった独自の絵肌は最小限の線のみで描ききくことを試しているかのような表現。しかし最近では輪郭線をやや鮮明にしてみました。小型の作品十数点の発表は少女像と風せんのモチーフによる単純な構成の二点が中心。ものさびしそうな表情の、沈んだ心理を描き出していきます。戦後の焼け跡にひとりひとり残された孤児を見る風趣があり、見る人の年代によつては競争体験を重ねて見せしめようような作品。その暗

さをかろうじて幼児のおどけなさが支えています。ほかには大きな与論島風景スケッチ多数も展示。



●香 木志雄展 22日まで、かねこ・あーとギャラリー(東京・中央区京橋三の七の二) 木材を使い多彩な制作をみせてきた作家ですが、平面作品の発表は久しぶり。ベニヤ板と白い建築用パテを使ったレリーフといつてもよい作品(写真右)。彫刻刀で板を浅く彫り込んだ部分に合板の木目が出て、緑色や黄色も感じさせる木の肌が深みのある調和をみせています。純白のパテがその一部に塗りこまれて作品にアクセントをつけています。木の感触と温かさのある色調の微妙な違いに着目し、壁のような白を組み合わせた日本的なデザインといえるでしょう。たかがベニヤ板を使っただけの作品にした、と驚かせる巧妙さは木を知りつくした作家ならではの味わい。

●ヨーロッパのタピスリー展 30日まで、東京国立博物館(上野公園) 古代エジプト、オリエンタルまでさかのぼることのできるタピスリーは城や宮殿の室内を飾った織物芸術。十二世紀ごろから中世の最後まで盛んにつくられ、裝飾に断熱や防音の効果を加味して、しだいに権威を誇示するものへと変化しました。織物の技術が進むにしたがって色彩もあでやかになり、複雑、精巧な絵が織りこまれるようになりましたが、その下絵は著名な画家が描いた例が少なくありません。フランスを中心に現存するタピスリーの代表例をみせる展覧会で、日本では初公開の作品が多数。羊毛、絹、金糸などのけらんたる織物に当時の王侯貴族の装飾趣味を見る歴史展でもあります。

●ヨーロッパのタピスリー展 30日まで、東京国立博物館(上野公園) 古代エジプト、オリエンタルまでさかのぼることのできるタピスリーは城や宮殿の室内を飾った織物芸術。十二世紀ごろから中世の最後まで盛んにつくられ、裝飾に断熱や防音の効果を加味して、しだいに権威を誇示するものへと変化しました。織物の技術が進むにしたがって色彩もあでやかになり、複雑、精巧な絵が織りこまれるようになりましたが、その下絵は著名な画家が描いた例が少なくありません。フランスを中心に現存するタピスリーの代表例をみせる展覧会で、日本では初公開の作品が多数。羊毛、絹、金糸などのけらんたる織物に当時の王侯貴族の装飾趣味を見る歴史展でもあります。